



Title	命令文と「命令性」
Author(s)	高橋, 英光
Citation	北海道大學文學部紀要, 43(1), 113-125
Issue Date	1994-10-21
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33639">http://hdl.handle.net/2115/33639</a>
Type	bulletin (article)
File Information	43(1)_PL113-125.pdf



[Instructions for use](#)

## 命令文と「命令性」

高橋英光

### 0. 初めに

この論文は(英語の)命令文には様々な「命令性」の度合いがあること、そしてこの命令性の度合いはSPEAKER COMMITMENTと言う概念でとらえることができる事を示す。

命令文は日常頻繁に使われる文だが、ここでは命令文を主節にのみ生じ、通常主語を持たなく、動詞が不定詞であるものと形式的な定義を与えておく。

命令文はこれまで4つの観点から研究され、初期の生成文法的分析(Kats-Postal 1964, Lees 1964, Thorne 1966), 語用論的研究(Sadock 1974, Green 1975, Mittwoch 1976, Downes 1977), 記述・機能的研究(Bolinger 1977, Davies 1986), 哲学的研究(Hare 1970, Huntley 1984, Hamblin 1987, Merin 1991)があり、HYPOTHETICALITY, NON-PAST(future), SECOND-PERSONという3つの本質が指摘されている。ここではこの他にSPEAKER COMMITMENTと呼べる本質的素性があること、そしてこの概念を設けると命令文に特有な振舞いの幾つかを説明できることを示す。

### 1. 命令文と話者のコミットメント

まずSPEAKER COMMITMENTを以下のように定義しよう。

(1) SPEAKER COMMITMENT: 話者が(命令文の発話時において)聞き

手の行為の実行に向けて適用する指令的効力の行使の度合い

この定義の中の「効力」「force」と言う言葉は Talmy 1988 の論文の中で使用された意味で使われる。つまり命令文は発話と言う状況の中で一方の実体（話者）がもう一つの実体（聞き手）に対してある対人的心理的な力を行使し、ある行動を起こさせようとする構文であるとする見方である。

例えば(2)のような命令文を見ると、

(2) Sleep until noon.

この文の自然な解釈は、話者が聞き手に昼まで寝なさいと言ってる、つまり command の解釈である。しかし次の(3)のような発話の中でのこの命令文の解釈を見ると、

(3) Sleep until noon, and you'll miss lunch.

この場合、話者は聞き手に昼まで寝ていなさいとは言っていない事になる。ここでは IF you sleep until noon, THEN you will miss lunch, so don't sleep until noon. のようなもので、この発話の中では「条件」と「警告」の両方が意味される。

さて、一方同じ命令形が以下の(4)の発話に現れると、

(4) Sleep until noon; you are very tired.

「命令」もしくは真剣な「助言」と解釈される。

以上の簡単な観察から次のような提案ができる。(3)と(4)の中の命令形の解釈の根本的な違いは SPEAKER COMMITMENT の違いから生じている。つまり(3)の命令文は SPEAKER COMMITMENT の値が低い、一方(4)の命令文は値が高い。そして、これと関連する第2の提案として(2)のような単独

の命令文は SPEAKER COMMITMENT の数値が潜在的に多義的・不確定であると言うことである。

上の提案の妥当性を調べよう。命令文と頻繁に共起する副詞語句の一つとして please がある。この please が命令文と共に生じるときは、常に聞き手の未来の行為に対する話者の丁寧ではあるが切実な感情を表す点において、「話者の態度を表す語句」(attitudinal)の機能を果たす。すると please は話者が命令文の内容に真剣な態度を持っているときのみ命令文と共起する、換言すると speaker commitment が高い命令文としか生じないことが予測される。

例えば(3)と(4)のなかで please が命令文と共起できるかを見ると、

(3)' ??Please sleep until noon, and you'll miss lunch.

(4)' Please sleep until noon; you are tired.

(3)' は奇妙なのに(4)' は完全に適格である。(3)' の奇妙さは please の執拗な響きと一方命令文の内容に対する話者の commitment の欠如の間の衝突として見ることができる。例文(5)は話者が軽い気持ちの提案の命令文であるが、please を加えると不自然になる。<sup>1</sup>

(5) Sleep until noon, or it might also be a good idea to wake up early and take a shower.

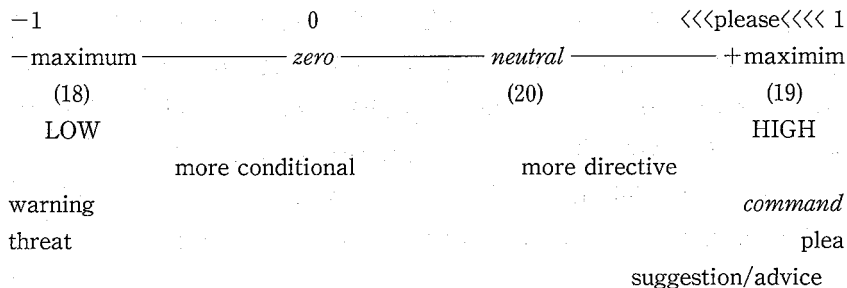
(5)' ??Please sleep until noon, or it might also be a good idea to wake up early and take a shower.

この様な観察から、please が共起できる命令文の SPEAKER COMMITMENT の範囲は狭く限定されていることが判る。please は弱い COMMITMENT の命令文とは生じない。また中途半端な軽い COMMITMENT とも共起しない。もっぱら非常に高い値の命令文としか使われない事になる。

そこで figure 1 のような作業仮説を立てよう。つまり命令文の SPEAKER COMMITMENT は最小値 [-1] から最大値 [+1] までの連続

体をなしている考え方である。

Figure 1 Imperatives & Speaker Commitment Continuum



この図が表しているのは、命令文は原理上この連続体上のどの地点でも生じ得るということである。連続体上の地点が高ければ高いほど命令文はより指令的 (directive) になり、低ければ低いほど条件的 (conditional) になる。例えば、(4)の命令文は「命令」、「懇願」、「助言」等を意味するが、これらの意味は連続体の高い地点から生じ、please ももつぱらこれらの高い地点から生じると考えられる。一方で(5)のように控え目な提案の命令文は[+1]と[0]の間の中地点から生じ、他方(3)のような「条件+警告」の命令文(話者が聞き手に対して命令文の字義通りの内容を実行することに対して警告している命令文)は、最も低い地点([-1]に近い地点)から生じると考えることができる。

無論、多くの場合命令文は「命令」を意味するわけであるから、この図の連続体上高い位置から生じると考えるのが自然である。しかし命令文が実際の発話の中で伝える非常に豊かな意味を観察してみるといわゆる「命令」の意味は内在的、本質的な物ではなく、むしろ典型的な (prototypical) 読みであり、命令形に内在的なのはあくまでももっと抽象的、一般的な仮定性 (HYPOTHETICALITY) と見なす方が以下の議論で扱う命令文の振舞いにもより一貫した説明ができる可能性を開く事になる。

例えば(6)(7)は通常「冗談」、或いは「皮肉」と理解される命令文である。

- (6) Write a letter in blood. (And she will read it.)
- (7) Marry your mother. (If you love her that much.)

figure 1 で提案した連続体上でこれらは [0] または [0] に近い所から生じるとして取り扱うことができるが、それには2つの理由がある。第一に、please は命令文の SPEAKER COMMITMENT の数値の高さを測定する尺度になることを既に見たが、ここで please を加えると(6)' (7)' のように非常に奇妙な命令文になる。

- (6)' ??Please write a letter in blood.
- (7)' ??Please marry your mother.

つまり、高い commitment を伴わないことが判る。第二に、これらの命令文は [-1] に近い地点から生じているとも考えられない。もし [-1] に近いなら、DON'T write a letter in blood とか DON'T marry your mother のような「警告」の解釈が可能はずである。しかし(6)(7)にその様な読みはできない。要するに話者は正にも負にもコミットしていないと言える。つまりこれらは [0] の (に近い) SPEAKER COMMITMENT の例と言える。

## 2. 話者のコミットメントと命令文の振舞い

次にこれまで提案してきた speaker commitment とする観念が命令文に特有な3つの振舞いを説明する上で有効であることを示す。

第一に広く了解されている事項として、know とか own のような状態術語 (stative predicates) は命令文に使われない。

- (8) ??Know the answer.
- (9) ??Own the house.

しかしこの同じ命令文が次の(10)(11)の発話の中では適格になる。

(10) Know the answer, and you'll get an A.

(11) Own the house, and you can invite a lot of people.

この(10)(11)の中の命令文は「命令」を意味しないので、pseudo imperative とか apparent imperative と呼ばれるが、このようにある命令形が異なる発話の中での容認性の違いは SPEAKER COMMITMENT の概念により説明することができる。前に指摘したように命令文の典型的な読みは command である。したがって(2)のように単独で解釈されると一般に command と受け取られ易い。つまり、文脈をもたず孤立した命令文は高い commitment の読みを強く示唆する。高い commitment の際命令文は聞き手による行為による状態の変化をもたらす指令的力 (directive force) の実際の適用を伴う。明らかにこの状態の変化と言う概念が stative predicates の意味的性格——変化の欠如、状態の無変化——と衝突することになる。

しかし、もしある特殊な文脈が与えられ、その文脈が命令文に話者の指令的力の行使の欠如を許ものであるならば stative predicates が命令文に生じることを妨げる要因がなくなる。(10)(11)の場合は命令形のすぐ後に IF-THEN の解釈を促す THEN に当る節が表れているため、状態動詞の命令文ではあっても、SPEAKER COMMITMENT の数値が [0] に近いと計算し易くなる。つまり命令形が純粋に「条件」を意味し易い。(10)(11)に please を加えると他の点では適格であった発話が不適格になる。

(10)' ??Please Know the answer, and you'll get an A.

(11)' ??Please Own the house, and you can invite a lot of people.

この事からも(10)(11)の命令文の COMMITMENT の数値は少なくとも [1] と [0] の中間点より低い事は明白である。その一方マイナス点から生じていないことも明らかである。なぜなら、これらの命令形の解釈は純粋な条件

## 命令文と「命令性」

(conditional) であって、マイナスの commitment に特徴的な「警告」、つまり負の意味は含まないからである。結果として、通常の常識とは反対に stative predicates は命令文に可能であると言うことになる。ただし制約があり SPEAKER COMMITMENT の値が [0] または [0] に近くなければならない。

第二に命令文がある特殊な文脈で過去の出来事に言及する場合がある。

- (12) In those days Tim was always hungry. Give him a few dollars, and he was happy.
- (13) A: How was the party? — B: Turn up yesterday and you'd have had a real shock.

ただし(12)(13)のような過去についての命令文には2つの制約があり、1つにあらかじめ過去の状況が設定され、さらに命令文の読みは純粹に条件でなければならず、「命令」の読みではいけない。これも命令文の本来の意味が命令であると言う常識への反例になるが、SPEAKER COMMITMENT の概念を使うと、この様な命令文は [0] または [0] に近い commitment から生じると仮定できる。この事は再び please を使ってテストすることができる。

- (12') In those days Tim was always hungry. ??Please give him a few dollars, and he was happy.
- (13') A: How was the party? — B: ??Please Turn up yesterday and you'd have had a real shock.

言うまでもなく(12)(13)は負のコミットでもない。“Don't give him...”とか、“Don't turn up...”のような読みはできない。

結果として過去の事柄に言及する命令文が生じる条件は、第一に過去の状況設定をする表現が先行すること<sup>2</sup>、第2に命令文が [0] 周辺の SPEAKER COMMITMENT であると説明できる。



第3に、「讓歩」を表す(14)(15)のような命令形を考えよう。

- (14) Love me or hate me, but you are my daughter.
- (15) Believe it or not, she is my daughter.

ここでも please を加えてテストすると、

- (14)' ??Please love me or hate me, but you are my daughter.
- (15)' ??Please believe it or not, she is my daughter.

(14)' (15)' の様に不適格になり、また "Don't..." のような否定の読みもないことからこれも [0] 周辺の commitment を伴うと取り扱うことができる。

### 3. 話者のコミットメントと Attitudinal items

SPEAKER COMMITMENT とは心的概念であり、英語の命令文の表面的な形式から直接観察することはできない。しかし話者はこの commitment の程度を please の様な言語形で表現する手段を持っている。するとこの様な副詞語句は SPEAKER COMMITMENT の明示的な標識と見なすことができる。以下の議論では命令文と共起できる please 以外の Attitudinals-do, for heaven's sake, TAG, just- を観察し、figure 1 の commitment continuum 上どの位置から生じるのかを指定することを試みる。

まず(16)は attitudinal と高い COMMITMENT の命令文の共起可能性を例示している。

- (16) *Please/Do/For heaven's sake/Just* sleep until noon; you are tired.  
Sleep until noon, *won't you?*; you are tired.

高い COMMITMENT の命令文とは全ての attitudinal が共起する。次に

命令文と「命令性」

軽い気持ちの命令文と attitudinal との共起可能性を(17)で調べよう。

- (17) a *??Please/??Do/??For heaven's sake* sleep until noon or it might also be a good idea to wake up early and take a shower.  
b *??Sleep until noon, won't you?*, or it might also be a good idea to wake up early and take a shower.  
c *Just* Sleep until noon or it might also be a good idea to wake up early and take a shower.

do, for heaven's sake の様な響きの強い attitudinal は please と同じく中途半端な数値の SPEAKER COMMITMENT の命令と共起しない。TAG も同じく悪く, just でさえ他の attitudinal よりは良いがやはり不自然である。

次に(18)は負の commitment の命令文と attitudinal との適合性を示している。

- (18) a *??Please/??Do/??For heaven's sake* sleep until noon and you'll miss lunch.  
b *??Sleep until noon, won't you,* and you'll miss lunch.  
c *Just* Sleep until noon and you'll miss lunch.

予測される通り強調的な attitudinal はここでも容認性が低く, TAG も不自然である。また just は再びここでも他の attitudinal よりは良いがやはり奇妙である。興味深いことには just は(19)の様な「冗談」, 「皮肉」, 「純粹」な条件の読みの命令文とは一般に共起し易くなる。

- (19) a *Just* write a letter in blood.  
b *Just* marry your mother, if you love her that much.  
c In those days Tim was always hungry. (?)*Just* give him a few dollars, and he was happy.



ただし典型的な命令文は [+1] に近い、高い SPEAKER COMMITMENT を伴って使われる。

- 4 「命令」(command) の読みは命令文の内在的意味ではなく、むしろ「典型的な」読みである。
- 5 副詞語句としての please 等の attitudinal は speaker commitment の言語的具現化と見る事ができる。また attitudinals と呼ばれる語句は一般に特定の高い speaker commitment の命令文としか生じない。

(注)

- \* この論文は 1993 年 9 月 22 日第 1 回認知機能言語学談話会 (北海道大学文学部)、及び 1993 年 10 月 2 日日本英文学会北海道支部第 38 回大会 (北海道教育大学函館分校) にて口頭発表された原稿に基づいている。参加者の様々な助言、提案に感謝の意を表したい。
- 1 ただし(5)の発話は、or の前に長いポーズが置かれると適格になる。それはポーズが or 以下の部分を “after-thought” 的にさせるため、前半の命令節が単独で解釈されるためと思われる。
  - 2 このように状況設定をする表現とは “Space Builder” (cf. Fauconnier 1985) の一種と考えることができる。

References

- Akatsuka, Noriko  
1985 “Conditionals and The Epistemic scale,” *Language* 61, 625-639.
- Bolinger, Dwight  
1977 *Meaning and Form*. London: Longman.  
1989 *Intonation and Its Uses*. Stanford: Stanford University Press.
- Comrie, Bernard  
1986 “Conditionals: A Typology,” in *On Conditionals*, pp.77-99, Traugott, Elizabeth Closs et al. (eds), Cambridge: Cambridge University Press.
- Davies, Eirlys  
1986 *The English Imperative*. London: Croom Helm.
- Downes, William  
1977 “The Imperative and Pragmatics,” *Journal of Linguistics* 13, 77-97.
- Fauconnier, Gilles  
1985 *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*.

- Cambridge, Mass. & London: MIT Press/Bradford.
- Givon, Talmy  
1982 "Evidentiality and epistemic scale," *Studies in Language* 6, 23-49.
- Green, Georgia M.  
1975 "How to Get People to Do Things with Words: the Whimperative Question," in *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, pp.107-141, Cole, Peter and Jerrold L. Morgan (eds.), New York: Academic Press.
- Haiman, John  
1978 "Conditional are topics," *Language* 54: 565-89.
- Hamblin, Charles L.  
1987 *Imperatives*. Oxford: Basil Blackwell.
- Hare, R.M.  
1970 "Meaning and Speech Acts," *Philosophical Review* 79. Reprinted in Hare (1971), *Practical Inferences*, Berkeley: University of California Press, pp.74-99.
- Huddleston, Rodney  
1988 *English Grammar: an outline*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huntley, Martin  
1984 "The semantics of English imperatives," *Linguistics and Philosophy* 7, 103-133.
- Jacobs, Roderick A.  
1981 "On being hypothetical," *Papers from the Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* 17, 99-107.
- James, Francis  
1986 *Semantics of the English Subjunctive*. Vancouver: UBS Press.
- Jespersen, Otto  
1961 *A Modern English Grammar, Part V*. London: George Allen and Unwin.
- Katz, Jerrod J. and Paul M. Postal  
1964 *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge: MIT Press.
- Lakoff, George  
1966 "Stative Adjectives and Verbs in English," Cambridge: Harvard University Computation Laboratory. *MLAT Report NSF-17*, 1-16.
- Lees, Robert B.  
1964 "On Passives and Imperatives," *Gengo Kenkyu* 46, 28-41.
- Merin, Arthur  
1991 "Imperatives: linguistics vs. philosophy," *Linguistics* 29, 669-702.
- Mittwoch, Anita  
1976 "Grammar and Illocutionary Force," *Lingua* 40, 21-42.

命令文と「命令性」

Ono, Haruhiko

- 1989 "Miraio arawasu *will* ga shoujiru if-setsu nitsuiteno oboegaki" (A note on 'Future' WILL in IF-clauses) *Musashi Women's College kiyou* 21, 1-38.

Palmer, Frank Robert

- 1986 *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press. Quirk, Randolph et al.

- 1985 *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Sadock, J.M.

- 1974 *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*. New York: Academic Press.

Takahashi, Hidemitsu

- (forthcoming) "The Imperative as a Causative"

Talmy, Leonard

- 1988 "Force Dynamics in Language and Cognition," *Cognitive Science* 12, 49-100.

Thorne, J.P.

- 1996 "English Imperative Sentences," *Journal of Linguistics* 2, 69-78.